

観念と閑かな感情と

——寂聴句集「ひとり」を読む——

佐 滝 幻 太

明朝が締め切りというギリギリになって原稿を書き始める悪癖は87歳になっている今も直らない。困ったものだ。

句集「ひとり」は、2017年5月15日、寂聴さん95歳の誕生日に発行された。俳人でもあり、たった一人でユニークな出版社「深夜叢書社」を営んでいた故齋藤慎爾氏の手によって出版された。高名な売れっ子の小説家が、敢えて小さな出版社を選んだのは、人と人の繋がりと、同社に対する世間の信用の高さ、加えて自費出版であることに因るのだろう。源氏物語「桐壺」の巻に「この君（光源氏）をばわたくしものに思ほし」という表現があるが、寂聴さんにとって、大勢の読者を獲得した400冊に余る小説等の散文の出版物が作家としての成果であるのに対し、この句集は、一頁に一句という贅沢な割付けで、

わずか85句を載せているだけであり、寂聴さんにとって最晩年のこの一集は、個人的にそっと抱きしめていたような可愛い一冊ではなかったろうか。そのため、書店には置かなかった筈である。

句集「ひとり」の「あとがき」に、作句のきっかけになった二つのことが書かれている。当時、文藝春秋社の出版部長だった車谷弘氏に誘われて、親しくしていた作家の円地文子（源氏物語の口語訳あり）と一緒に「文壇句会」に出席した。参加者は文壇・俳壇の著名人ばかり。宗匠は、短編の名手として知られていた永井龍男氏で、俳句にも厳しい人であった。彼が一人で選んだ最高点の人には、立派な褒美の品が与えられた。新入りの二人は、いつもビリ二とビリ（ビリは寂聴さん）で、トイ

レットペーパーを一巻ずつもらって帰った。それでも続けたのは、句会後の食事が銀座の有名な料亭「田村」で、その美味に魅かれてのことだった。

もう一つは、最近亡くなられた俳人黒田杏子ももことの縁であった。

寂聴さんは、戦前の徳島では伝統校「徳島高等女学校」を一番（たぶん最初に名前を呼ばれる優等生）で卒業し、東京女子専門学校（戦後「東京女子大学」になる）に入学。寂聴さんが50代後半の頃、杏子さんが大学の後輩ということで、単身寂庵を訪ねた。二人は親交を結び、杏子さんが創刊した俳誌「藍生」の関西句会を、長い間寂庵でひらく。私事だが、私も、十数年在籍した徳島の或る結社誌を退会した後、たまたま創刊されて間もない「藍生」の、「同人制」は敷かないという方針に共鳴して、数年間、投句した。

寂聴さんのきょうだいは姉一人だが、その長男で、今は故人の敬舟（俳号）さんも「藍生」に入っていて、「藍生 徳島」数人で、一度だけ、吟行を兼ねて寂庵を訪ね、持仏堂の板間の隅に座卓を置いて句会をしたことがある。予告はなかったが、始まるとすぐ作務衣姿の寂聴さんがすっと入ってきて、句座に参加してくれた。挨拶も何の講釈もなく、仲間の一人のような感じがであったことが印象に残っている。

寂聴さんは月一回の「藍生」の関西句会に参加した。だから、そこに句を出すための作句はしただろう。「文壇句会」への参加は、或る時、永井龍男の一言「円地さんや瀬戸内くんのように小説が売れている作家にいい俳句は生まれないんだ」に怒った二人が退会して、終わった。だから句集「ひとり」の句の多くは「関西句会」に出した句だろう。黒田杏子の添削が入っているととしても、それは「てにをは」（助詞）の範囲であろう。それは句を読めば判るし、作者のプライドがそれ以上は許さないだろうからだ。

前置きが長くなったが、以下、テーマごとに選んだ句を引いて、短い感想を付したい。

- 1 をとめらの足首ぽそ織し青き踏む
- 2 祇王祇女智照尼の墓冬紅葉
- 3 群離る胡弓追ひゆく風の盆
- 4 老いし身も白くほのかに柚子湯かな

写生句の範疇に入ると私が思う句である。1は「足首織し」に発見がある。2の祇王祇女は、平家物語に登場する、平清盛の寵愛を一身に受けた後、捨てられて出家した白拍子（遊女）の姉妹。嵯峨の少し奥の山がかった斜面にある祇王寺の前には、

美しい苔の拡がる楓の疎林がある。3は越中八尾の9月の初めに行われる豊年祈願の行事。動きがあり、胡弓の音が切ない。4は自画像。意外にも、写生句の対象として俳句では多い山川草木などの自然を描いた句は、「雪清浄奥嵯峨の山眠りけり」以外は、ほとんど見当たらない。

- 1 氷柱燦爛訪ふ人もなき草の庵さんらん
 - 2 ペン置けば深夜の身ほとり冴え返る
 - 3 春風に伽羅きやらたけば今朝指匂ふ
 - 4 雛飾る手の数珠しばしはづしをき
 - 5 身ほとりのものの芽ばかり数へをり
 - 6 落籍ひかされし妓の噂こなど四日かな
 - 7 ひとり居の尼のうなじや虫しぐれ
 - 8 飯の世の修羅書きすすむ霜夜かな
- どの句も寂庵で作った句。1、2の冬の句。孤独感が伝わる。冬は訪問者が少なかったらしい。3は、お香の、貴重な香木を削って焚いている、風雅な生活。5、寂庵は多種多様な草木に囲まれている。6、寂庵さんは小説の取材のために祇園に知人がいた。7と8は自宅での自画像。季語に心象が滲む。

- 1 雲水の花野ふみゆく嵯峨野かな
 - 2 羅うすものの縵衣しえの袂に蛩拾ひため
 - 3 ほたる抱くほたるぶくろのその薄さ
- いずれも作者の美意識から生まれた句だ。2は、夏用の尼の、透けるような墨染めの衣。3には、細部の発見がある。

- 1 紅葉燃ゆ旅立つ朝の空や寂くう
- 2 生ぜしも死するもひとり柚子湯かな
- 3 二河白道にがびくどう駆け抜け往けば彼岸なり
- 4 天地あめつちにいのちはひとつ灌仏かんぶつ会
- 5 経行きんぎんの蹠あしひややかに踏みにつけり

1の「旅立つ」は、他に「出離へのわが旅清め野火熾さかん」という句もあるから「出家への旅立ち」と解したい。「寂」という一字を、京の法然院のさり気ない墓地のわが自然石の墓に刻んだのは、谷崎潤一郎である。寂庵さんの親友で、同人誌仲間、同世代作家河野多恵子は谷崎を神のように崇拜していた。この「空と寂」はまさに観念的発想の典型だと思う。3の「二河白道」も仏教用語。4は、天を指さす小さな誕生仏（釈迦）に甘茶をかける花祭。5の「経行」は座禅中に眠気を防ぐため歩くこと。作者は雲水と一緒に延暦寺等で座禅をしたことがある。他に、

出家者ならではの「曼陀羅山」「珈梨帝母」等の仏教用語を用いた句もあることから、出家は作者の俳句に影響を与えた。自然なことではあるだろう。

- 1 初恋も海ほづきの音も幽か
- 2 雛の間に集ひし人のみな逝ける
- 3 むかしむかしみそかごとありさくらもち
- 4 思い出すことみな愉し木の芽山

老いると人は回想の中で我が人生を肯定したくなる。うつくしい思い出が多いのも納得できる。それが生きる力になるからである。

- 1 春逝きてさてもひとりとなりにけり
- 2 人に逢ひ人と別れて九十五歳
- 3 独りとはかくもすがしき雪こんこん
- 4 御山のひとりに深き花の闇

句集名を「ひとり」とした所以の句たちである。1は、春愁の後の孤独感である。2の「逢ひ」は「会ひ」とは違う。かつての恋人など情愛関係にあった人を指す。3は、最晩年の孤独とは裏腹の関係にある感情であり、作者の強さのあらわれた言

い回しかとも思う。4は岩手の天台寺だろう。「花の闇」に作者らしい彩りがある。

- 1 子を捨てしわれに母の日喪のごとく
- 2 もろ乳にほたる放たれし夜も杳く
- 3 七草籠子なき夫婦の声は似て
- 4 鳥渡る辛い手紙を読みさして
- 5 ぼうたんのうたげはをんなばかりなり
- 6 煩惱もあはあはとなり春愁
- 7 小春なり廓は黄泉の町にして
- 8 秋冷や源氏古帖の青表紙
- 9 落飾のち茫茫と雛飾る
- 10 骨片を盗みし夢やもがり笛

1は心の奥底に常にある心情。母の日なればなおさらである。他者の推測を拒否するような句。2は恋人との思い出だろう。艶めかしくもロマンがある。3は正月の句。子なき夫婦はふう皆仲がよい。4、他人からの手紙ではないだろう。例えば別れた夫との間に生まれた一人娘、アメリカに住む彼女とようやく母と子の関係が成立、娘からの手紙で母なき生活での心情が綴られている。そんな場面を私は想像した。最後まで辛くて読

めないのだ。5、牡丹と女たち。なるほどと思ったりする。6、本能に由来する煩惱も、恋の作家でもあった作者にとって大切なテーマであった。「あはあは」は淡々。老いた自分への嘆き。「秋思」とちがひ「春愁」は肉体的情景と結びつく。7、昔のようなことはないにしても、そして格式ある祇園といえど、若い女性の色香を売りにしていることに変わりはない。それを「あの世の町」と断じた見立ては鋭い。欲が支配する世界は死へも通ずるからだ。8、青もいろいろあるが、江戸時代の分冊の「源氏物語」の和綴じの表紙の青は、藍色を淡くしたようなシブい色だったのだろう。冷たさにも通じる色だ。9、「茫茫」に込めた作者の感慨を他人がかんたんに推し量ることなどできない。名のある女流作家が中年で出家することなど稀有なことだからである。10の、潜在意識から生まれたスゴイ夢も、晩年の荒涼とした心象風景と無関係でないのかもしれない。

今年6月の「週刊文春」に「瀬戸内寂聴」衝撃の書“が明かす48歳下『最後の恋人』との愛と性」と題した、ゴシップと思われる記事が載った。真偽不明の記事ではあるが、私は一瞬「寂聴さんヤルナア」と思った。

瀬戸内寂聴さんの膨大な文筆活動を通して常に思ったのは、

そのたくましい行動力と生命力である。ところが晩年に出た句集「ひとり」を読むと、しずかで素直でまじめな「素」ともいえる姿が立ちあらわれてくる。たぶん、その両面が寂聴さんにはあるのだろう。短い俳句形式で虚構を弄することは難しく、この俳句を作る寂聴さんの方が、生来の彼女の本性にあるものではないかと私は考えている。

寂庵から寂光院へと秋風裡

幻太